



イスラーム共和国をめぐるイメージ構築

——他者化と理解のはざままで

山岸智子

最近ネット上の記事や映像を見ると、ムーサーヴィー支持派のグループが「ホセイン、ホセイン、ミール・ホセイン！」と叫んでいる様子がかがわれる。加えて「アッラーホ・アクバル（神は偉大なり）」を連呼する声が絶えることはなかった」と

いうような記事を目にすると、どうしても三〇年前の革命と比べて感慨にふけてしまふ。革命過程は壮大なるソハンヴァアリー（詩などを朗詠して競う歌会）だった、という論文を書いたのはかれこれ二〇年前のこと、その後の自分の研究関心と、折にふれて感じ考えたことを記してみたい。

●イデオロギーの逆襲

私はイデオロギーにも制度（システム）にもどうも信が置けない、そしてパワーポリティクスにも、とんとなじめない。ありていにいえば理解できないのだ。といって現代イランへの関心はぬぐいがたく、革命へのアプローチは、民衆参加と「イメージ戦略」の相関を考察する角度からになった。ところが、イメージ戦略を研究するための確立された方法論があるわけではない

ので、修士論文を出したあとは、歴史学や人類学、社会学のあいだをうろろしながら、ペルシア語のリズムを体得しようとテヘラン大学で文学の授業に出席させてもらったり、「カルバラーの悲劇」の展開を文献からたどったりしてきた。

そんななかで、多くの人が抱くイランやイスラームのイメージと、自分が研究対象と考えているものとの間にあるギャップに気づくようになった。自分がやっているのは学問だから、と主張できるほどの「デイシプリン」もなく、「えー、イランでイスラム服を着ていたの？（信じられナイ）」「そんな危ないところに何故また（よほどの物好き）？」といった質問に、「まあ制服の一種と思って暮らせばいいことない、家の中は自由だし」「みんな普通の生活をしていて、宗教指導者の悪口やジョークを言ったりしてるけど」などと私は無様な対応しかできなかった。イメージ・ギャップのあちら側にいる人びとにどうやって橋渡しができるのか、そもそもギャップの所以は何か、自分のなかで整理できないままに何年もが経過した。

愚か者の私がやっとわかった要点…イラン・イスラーム体制など「ありえない」「信じられない」「トンデモナイ」とするところから話を出発させる多くの見解からすれば、私のようにイラン・イスラーム体制を、「あると思います」という前提で考察や説明をする姿勢は、異常であり理解に苦しむとのことらしいのだ。私とて、イラン・イスラーム共和体制を礼賛するつもりは毛頭ないが、「トンデモナイ」観を正当化するためだけの批判に与するのにも片腹痛い。

●イラン映画

最近やっとわかったのだが、「イデオロギーの論法にはどうもついてゆけない」と思っていた私は、こんな形でイデオロギー対立を思い知らされていたのである。

イメージの変化は、思いがけないところからもたらされた。「イラン映画」への高い評価である。留学中に日々看板を目にしたリ、テレビで見たり、友人が褒めたりしていた映画監督キヤロスタミーだのママルバーフだのの作品が、まったく想像もしていなかった評価を日本で得るよう

なった。日本で名のある映画監督、評論家や俳優たちがイラン映画について、肯定的なばかりでなく高い評価をしているのは、嬉しくもあり不思議でもあった。イラン在住の日本人ならば必ず悩むようなイラン人の言辞・態度・日常生活の違いについて、映画を好んでみた人々は、ほとんど問題にしていなかったのだ。映像は生活感を映し出しながらも、どうやらそれを越えたところで人の心を掴むらしい。ペルシア語講師をしている友人は、ペルシア語を習いに来る学生の多くが、映画を見てイランについてさらに知りたくなったと言っている、と教えてくれた。(しかしながら三年ほど前から、その友人は、学生数が減ってしまっ、とこぼしている。)

イラン映画の評判が良いからと、大学の1〜2年生むけに「イラン映画を通してイランについて知ろう」というゼミを開講したら、二〇名余が最初の回にやって来たが、イラン映画を見たことのある学生は一人しかいなかった。学生たちは口々に「イランに映画があるなんて知らなかった」などと言い、イラン映画のブームは局所的なものであり、ハリウッドの資本力には全然かなわないのだ、と改めて認識した。

●新しいアプローチ

一九九〇年代の終わりから二一世紀初頭にかけて、欧米で学位を取った新世代のイラン系研究者の仕事に出会えたことは、僥

倖であった。多くは私とほぼ同年代で、欧米で生活するなかでおそらく私よりも深刻にイラン人・ムスリム・アイデンティティのあり方に悩んだことは想像に難くない。そして彼女ら／彼らを選んだ道は、「モダン」を再検討する研究トレンドのなかに身をおき、二つのイデオロギー世界の和解やイメージの修正を追求することだった。

故大塚和夫先生と一緒に研究プロジェクトにいられたこと、ナラティヴ (narrative) という概念について勉強する機会を得られたことも幸いだった。それまで自己流ながらも、構築主義の考え方を学び、「再現前／表象 (representation)」をキーワードとしていたが、そこに「ナラティヴ」という研究材料を加えて考察することができるようになった。さらに大学での講義のために読みかじっていたカルチュラル・スタディーズの書物から「位置取り (position)」という概念も学び、ナラティヴとは、語る人の立場やアイデンティティを表現するものであると考えられるようになった。そこで、イランについての言説とイメージ、表象の作用とその表象を創り出す位置取りを分析し、考察する可能性が見えてきた。おかげで、自分が(他人が)、イランを語るその位置取りを、客観視できるようにならないですむようになったのである。

●「九・一一」

そんな時期に「九・一一」が起きたのも、不思議なめぐり合せのように思える。一九九一年夏、イランと英国を往復していた私は、イラクのクウェート侵攻を機に、イラクとサウジアラビア・フセインがみるみるうちに「悪者」に変貌して行くのを咄然としてみていたが、二〇〇一年の「九・一一」後のプロバガンダはそれ以上だった。「テロとの戦い」という勇ましいけれども内容の曖昧なキャッチフレーズが大きな力を揮うのを知り、プロバガンダとイメージ戦略についてさらに問題意識が深まった。

他方、「イスラーム世界との交流」をお題目とする日本の政策的なプロジェクトの末席を汚す機会もぼつぼつとできた。イラクやインド洋への派兵とひきかえに中東との「文化交流」だの「異文化理解」だの予算が増える皮肉に忸怩たる思いをしながらも、今まで知ることの少なかったイラン以外のムスリム諸国訪問や対話の機会を得た。日本においてイランは「中東」や「イスラム」のワン・オブ・ゼムとして扱われるが、多くのアラブ諸国はイランとの間の緊張関係から、むしろ「他者イラン」像を強調しているように思われた。

イランの東西両隣の国が攻撃対象となつて大きな被害を受けたために、国力を温存するイランは相対的にプレゼンスが大きくなった。そんな国際的力関係の変化のなか



で、イランの影響力は「シーア派」がらみであるとの説が浮上した。しかし、新たなシーア派ネットワーク説もまた、恣意的な本質論に基づくように思われた。

● 翻訳書

この数年、イラン系の著者の本の翻訳が相次いでおり、新聞の書評欄などでもとりあげられている。その翻訳書の多くは、著者がイラン系であっても主として英語で書かれ欧米で高く評価されたもので、英文翻訳の専門家が訳している場合が多い。

こうした本が市場に出る背景はどういうものかと疑問に思い、機会を得て翻訳家の白須英子氏に尋ねた。「イスラム側について説明ではない」本を求めて『「ニューズウィーク」誌などの書評欄で高い評価を受けている本を読み、興味深いと思われたら出版社に翻訳の出版を打診する、とのことだった。

これらの本には、知識不足による翻訳上の問題も散見されるが、それ以上にこれらのナラティヴの「位置取り」に、私は危惧を抱いている。『テヘランでロリータを読む』がその顕著な例としてあげられると思うが、著者はイラン人だからこそ書きうるダイテールからイランの状況を活写し、読者を強く惹きつける。そして読者は「イラン人」主人公に感情移入しながらも、「イランはとても暮らしてゆけない場所」との先入見に安住できるしくみになっている。

すなわち「イラン」を「他者化」する構造に立脚し、他者化を強化するるのである。確かに著者たちが主張するように、イランで表現や言論の自由が十分保障されていないことは問題である。ただ、現在イランにいる数千万の人びとを「あちら側」に押しやってしまうと、和解や理解の道も閉ざされてしまう。これらの本は魅力的でイランの一面を示していると思いつつも、やはり従来の欧米の書物の基本姿勢を変えるものではない、新しいのは描く手法のみだと評価せざるを得ない。イラン映画で描かれたつましい民間の暮らしへの理解が、むしろこうした翻訳書によって遠のいてゆくのではないかと、気がかりだ。

イラン国内で評判になっていく著作が日本語に翻訳されて出版される機会は皆無に近い。そんな現状で、日本で名のある文芸誌『すばる』が二〇〇八年二月号で「イラン女性文学」特集を組み、短編小説の翻訳などが掲載されたことは、朗報だった。

● 精神分裂？

この数年、ごく短期間ながらも、イランを訪問する頻度が増した。そこで、イラン国内の「政権冷笑側」と「最高指導者側」とでも呼ぶべきギャップにどう対応するかという新たな難問に直面している。短い期間にいろいろな人ときあおうとするからなのだろうが、衛星放送でアメリカ発の番組を視聴し、「アーホンドども」の愚かな

言動を嗤う層の人たちと、最高指導者の大きな写真掲げること違和感を持たぬ人たちとの間の見解のギャップが大きくなりすぎて、時間を置かずにその両者と話す、精神分裂を起こしそうな気分がするようになった。前者の方が多くの日本人にとって付き合いやすいだろうが、私は後者も必ずしも嫌いではないし、彼らが愚かだとも思っていない。この両者が大統領選挙を通じて、そして選挙後の政治の場で和解や妥協を図ってくれば、と私は少しナイーヴな期待を抱いていた。

● おわりに

大統領選挙後の「運動」あるいは「騒擾」をどう理解すべきか、選挙管理に不正が疑われる政府への《批判》なのか、イスラーム共和政や最高指導者の権威を《否定》する運動なのか、はたまた日頃の鬱憤晴らしなのか、見解は分かれる。スローガン *Shereh* から私が観察できる限りでは、まだ新しい体制のイメージもイデオロギーも浮かびあがってきていない。でも三〇年前だって革命の成就までには一年以上の運動期間を要し、そんなに簡単に体制が転覆するはずはない、と言われ続けた。さてこれから新しいイメージ戦略の展開があるのか否か、ちよつとワクワクする今日この頃である。

(やまぎし ともこ / 明治大学准教授)